

「芝公園六角堂跡」

西村賢太

西村賢太作品は何度も書評してきたが、今回はこれまでとはちよつと趣がちがう。この本とどのように向き合うのがほんとうにいいのか、ちよつと決めかねている。

本書には四つの作品が収められている。これまで氏の多くの短編集とはちがいが、四つが緩やかな連作をなしているというわけではない。明らかにバランスが悪い。表題作の「芝公園六角堂跡」が分量的にも内容的にも重く、全体を見渡しても、これまでの氏の作品にはあまりなかった妙な緊張感がある。もちろん読者をとらえて離さない書きぶりはいつもながら巧みだし、記憶に残る台詞や場面もあるのだが、にもかかわらずどこかじたばたしてつような、もがきのようなものを感じる。

「芝公園六角堂跡」の主人公は我が北町貫

傾倒してきた大正期の私小説作家——が「狂凍死」したとされる場所であった。藤澤は芝公園内の「六角堂」と呼ばれる休憩所で死んでいたのである。建物は今は失われ、正確な所在もややあいまいだが、資料を総合するとおそらくあったのはそのあたり、つまりここが藤澤清造の終焉の地なのだ、と感慨にふけりつつ貫多は苦い思いをかみしめる。自責の念がつつた。コンサート会場に向かうときにも、わざわざこの場所をさけるルートをタクシー運転手に頼んでいた。貫多は思う。自分は田中英光、ついで藤澤清造という私小説作家の執筆姿勢に打たれ作家になった人間である。それが今はどうだろう。方向を見失っているのではないか。「何かこう、自らの土性骨が太くなるにつれ、本来の基であった支柱が押されてズレてしまった感覚があるのだ」と。

以前、この中編を文芸誌で読んだとき、ふだんの西村作品には見られない華やかなコンサート風景や、語り手の意外なお行儀のよさが新鮮に感じられる一方、芝公園に佇みながら主人公が物思ふ終わり方のねちっこさには、やつぱりこの作家らしい強靱なこだわりが見え、この強引なパラスの取り方に、これまでではないぬかるみを新しい境地に向かって作

異次元への一歩か

阿部公彦

多である。貫多は冬のある日、都心のタワーホテルを会場にした尊敬するミュージシャン「J・I」のコンサートを訪れる。チケットも持たずに現れた野暮ったい格好の貫多に対しホテルのボーイが一瞬、見下したような視線を投げてきてカチンとくる、というあたりはいつもの賢太節で、読んでいると「お、きだな」と思う。貫多は客席がたった一五〇席に限定されたこのプレミアムコンサートに「J・I」自身により招待されていたのである。貫多にとり「J・I」は特別な存在で、それだけにどこか浮き足立っている。演奏の様子やその後の「J・I」との触れ合いには、そんな貫多のうわづたずつけぶりがたつぷり挿入され、いつものように楽しく読める。

西村作品を読み慣れた人なら「J・I」が

家が踏み出しているような印象を受けた。しかし、そんな聞いた風な解説ではとても説明できない何かがこのでは起きているのかもしれない。この書評の勝負もこの先である。「芝公園六角堂跡」の残りの三つの作品は、表題作とは対等な位置にはない。たしかに三つとも作品としての自立性は持ち、短編としての落とし前はつけているのだが、それぞれが表題作「芝公園六角堂跡」に寄生し、からむのである。文句をつけ、批判し、直後の「終われなかつた夜の彼方で」などは、具体的な書き直し案まで含んでいる。最後の「十二月に泣く」ではそんな「終われなかつた夜の彼方で」によるからみをさらに批判するようないくつかある。つまり、本書の作品群は、主人公が恠怩たる思いに駆られる「芝公園六角堂跡」の苦い思いを、さらに後続の作品が否定・批判するという徹底的な泥沼の中で組んず解れつからみあっているのである。

問題は、そんな泥沼を読者がどれくらい十分に追体験できるかということである。先に触れたように、私などは中心となる表題作をそれなりに作品として受け入れてしまった。少なくとも、作家が痛烈に悔いているとおぼしき「J・I」への遠慮——「要らぬエクスキューズ」——をまったく感じなかったと言



文藝春秋 1500円＋税

稲垣潤一を指すとはわかるだろう。かつて「秋恵物」の短編では、部屋でたえず稲垣の音楽を流すのが秋恵の習いとして描かれ、そのふつうさとかやりやすさがかえっていじらしくて独特の感興がわいたものだが、何のことはない、ほんとうは貫多自身が熱烈な稲垣ファンだったようで、ちよつとばかり潤色して「秋恵」の人物設定に生かしたということらしい。貫多も——そして西村賢太本人も——その後稲垣潤一の知己を得たことを大いに誇りにし、著作の「解説」まで依頼している。しかし、ふだんとは明らかに違う華やかな場を舞台とした作品が、そのまま終わるわけではない。コンサートと打ち上げで大いに浮かれた時間をすごした貫多は、帰りにホテル近辺の或る場所に立ち寄る。それはかの藤澤清造——すなわち北町貫多が歿後弟子として

つては嘘になるが、それほど痛烈には感じなかった。おそらく多くの読者はそうではないだろうか。

読者をこれほど置いてけぼりにすることは西村作品ではあまりない。主人公の無軌道で理解不能な行動も、コミカルさや哀切感とともにずっと小説中におさまる。ところが今回の連作では、瑕瑾をみずから暴き立てつつじくじくと「ごだわり」が化膿し、その病のエネルギーを肥やしにして四つの作品が生まれている。このわかりにくさは何なのだろう。そこで想起されるのは、語り手が田中英光の作品に触れ、「余りの文章の下手さと、余りにも面白くて共感できる、かの内容に驚いた」と言っている箇所である。「下手さ」と「面白さ」のセットは、決して狙って達成できるものではない。むしろあらゆる作家にとつての永遠の夢。だからこれも決して狙ったものではないに違いないのだが、自身の作品に疑問符をつきつけより高い地点を目指すように見えて、実際には泥沼に陥るといふプロセスには、文章の上手さなどではとてもたどりつけない何かが見える。「今まで見せなかつた何か」をむき出しにすることにかけてはもともとと驚異的な才能を示す西村賢太だが、今回は少々異なる次元なのかもしれない。